

第 63 回国際理解・国際協力のための全国中学生作文コンテスト  
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟会長賞

本年は SDGs の中間年。2030 年までに 17 の国際目標から成る SDGs を全て達成するために、日本ができることは何か。

愛知県 長久手市立北中学校 2 年 近藤 快

毎年、駅や校内で痴漢撃退の啓発ポスターが張り出されます。アメリカ人の先生が、ポスターを見て、いつも被害者＝女性なのはおかしいよね、と仰いました。先生は、毎年送られてくるポスターを見て、被害者が決まって女性ということに違和感を感じるようでした。

SDGs の目標のひとつに、「ジェンダー平等を実現しよう」があります。私の育った環境からは想像もつきませんが、世界には女性というだけで差別の対象となり、満足な教育を受けられない人たちがたくさんいます。

誰しも、自分の生まれ育った環境に強く影響され、考えや生活習慣が培われていき、やがてそれが、自分たちの社会の常識に繋がっていきます。

前述した、女性の人権を認めない不平等な社会も、先生の指摘があるまで、ジェンダーギャップに違和感を持てなかった私も、根底では似ていて、固定概念や思い込みで囚われて、凝り固まった視点でしか物事を見ていなかったことに気が付きました。ジェンダーの不平等を身近に感じる事ができた出来事でした。

私の幼馴染の友人家庭では、実の親が育てられない子供を、家族の一員として迎え入れています。私は友人宅に行くと、いつも里子たちと遊ばせてもらっています。小さい子を弟や妹のようにお世話している友人が羨ましくて、私は母に里子の受け入れをしたいとお願いしました。そして、両親の協力もあり、三年前からネグレクト等の理由で、児童相談所に保護される小さい子の一時保護の受け入れを始めました。赤ちゃんが可愛いからと始めた里子の受入れですが、里子に来る理由は様々だと知りました。そして、十分な食べ物と愛情を与えられない子供たちがたくさんいる事を目の当たりにしました。私は毎月、ホームレスの方々にお弁当を配るボランティアもしていますが、赤ちゃんからご年配の方まで、飢えといつも隣り合わせで生活し、安心できる場所を必要としている人たちがたくさんいる事を日々実感しています。里子に来る小さい子たちも、ホームレスの方たちも、自分たちとは異なる特別な人たちではありません。子供たちは可愛いし、ホームレスの方たちも怖い人たちではなく、普通のおじさんたちです。

困っている方はまだたくさんいます。私は愛知県と神奈川県に本部のある、日本介助犬協会でも、四年前からボランティアをしています。介助犬とは、手足の不自由な方の日常生活をサポートし、その方のパートナーとなる犬の事です。世間では、バリアフリーという言葉が広く知られ、駅のエレベーターの設置等、社会全体の理解も深まり、どんどんバリアフリー対応の流れになっていると実感しています。しかし、車いすユーザーの方のお話を直接伺

うと、写真で確認して入れそうなお店でも、少しの段差があって入店できなかったり、困る事も多く、「バリアフリーなんてまだまだ。」というのが、正直な気持ちだそうです。

中学生の私たちがすぐに始められる事。それは、知る事だと思います。私たちの周りには困っている人達がたくさんいて、みんなも困っている人達を助けたいと、強く想っています。世界中が、誰も置いてきぼりにしない社会、みんなが笑顔になれる社会を強く望んでいます。国や企業、団体に任せておけば大丈夫という考えを捨て、ひとりひとりが関心を持ち身近に感じる事ができれば、より良い社会の為の選択ができると思います。そして、ひとりひとりの意識が変われば、世界はすごいスピードで変わっていくでしょう。そうすれば、必ず、2030年までに17の目標を達成出来ると、私は信じています。